

# 女子短期大学部生の英語力の動向

中 島 直 樹

平成14年4月、城西大学女子短期大学部英語力調査が実施され、一部の外国人留学生を含む93名の女子短期大学部新生が受験した（経営情報実務学科67名：現代文化学科26名）。近年、短大を取り巻く環境が変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。学生の英語力にも多様化の現象が見られ、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教員サイドがあらかじめ認識しておくことがより必要になった。また、その調査結果を基に一年次の英語の必修科目であるプラクティカル・イングリッシュとカレント・イングリッシュを能力別のクラス編成にして、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ろうというねらいで、数年前から新生全員に対して実施されている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、経営情報実務学科と現代文化学科に改組された後に初めて入学した昨年度学生の英語力調査の結果と比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。

## 1. 昨年度の結果について

まずはじめに、昨年度（平成13年度）の英語力調査を振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験であった。前回の調査（平成12年度）と同一内容の試験問題であったため、前年度の新入生との比較が可能である。受験できなかった学生もいたが、新入生のほとんどにあたる104名が一斉に受験した。全体の平均点は約35.4点であった。学科別の受験者数と平均点は以下の表の通りである。

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	81名	約35.3点
現代文化	23名	約36.0点
全 体	104名	約35.4点

平均点の約35.4点という数字は当初予想していたよりもかなり低かった。最低限の基礎力があると思われる数字（45点程度）には程遠いものであった。同一問題を使った過去数回の英語力調査の中で昨年度の新入生の平均点が最も低いという結果になってしまった。平成12年度の全体の平均点は約38.3点であり、昨年度の平均点はこれよりも2.9点下がってしまった。実際に授業を担当していて、学生が英語の基礎力を十分には身に付けていないのではと感じることがしばしばあるが、それが数字の上にも表れた結果になった。

また、昨年度の学生の調査結果には、これまでにない新しい傾向が見られた。全体の得点の分布を見てみると、分布の仕方が平成12年度のそれと比べて大きく変わっており、本学の新しい特徴であった。平成12年度のピークは30～34点のところであり、40～44点、35～39点と続いていた。この三つの得点層は一つの大きな集団を形成していて、全体の受験生のほぼ半数がここに集中していた。そして、この半数にも及ぶ大きな層を取り囲むようにして、その前後に、ある程度基礎力のある学生の層（45～49点の層と50～54点の層）とほとんど基礎力のない学生の層（20～24点の層と25～29点の層）があり、この二つの層の学生数はほぼ同数であった。60点以上のかなり基礎力のある学生も14名おり、最高点は70点であった。それと比較して、前回平成13年度の結果はどうであろうか。ピークは同様に30～34点のところであり、40～44点、35～39点の層の学生数も多い。しかし、大きく異なるのは、25～29点の層の学生数が非常に多くなったということである。40～44点の層と並んでピークのすぐ次に位置している。平成12年度には大きな集団の周辺にあった層が次年度ではその集団の中に入り込んでしまったのである。基礎力に不安のある中間層が今まで以上に膨れ上がったと言えよう。昨年度のもう一つの特徴は、今までかなり基礎力があるとされてきた60点以上の層の学生がほとんどいなくなったことである。このことも、昨年度に入学した学生の間層の肥大化をよく物語っていると言えよう。

## 2. 今年度の結果について

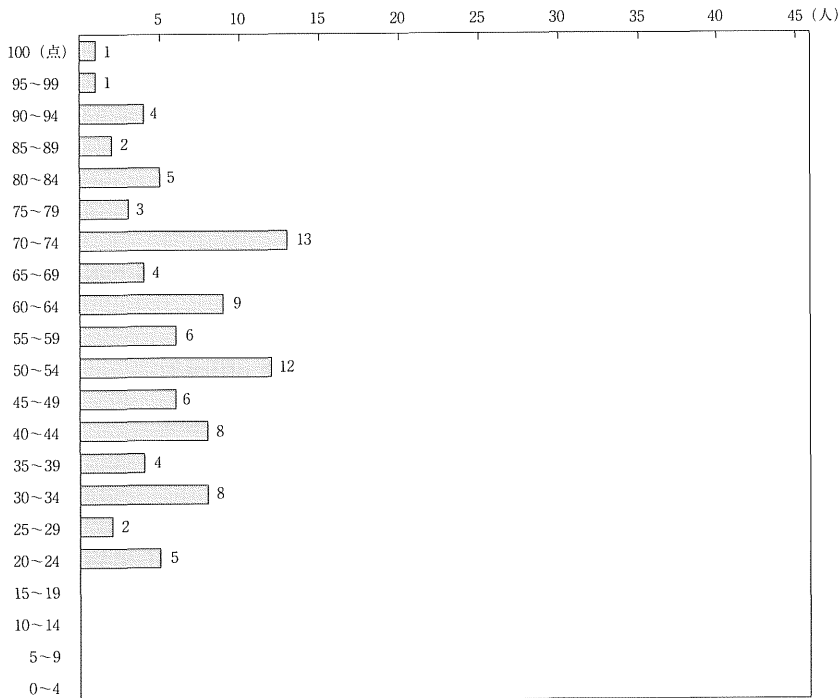
今述べた通り、昨年度は中間層の学生の割合が多かったので、今年度の英語力調査ではその中間層を解明することを課題のひとつにした。平均点が30点台というのでは試験としては難しすぎるし、更に平均点が下がる恐れもあるため、今年度は新たにもう少しやさしい試験問題を作成した。昨年度との単純比較はできなくなるが、これにより学生の英語力の差が鮮明に表れるはずである。

昨年度と同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験とした。受験できなかった学生もいたが、新入生のほとんどにあたる93名が一斉に受験した。全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は次の表の通りである。

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

今年度は学科による逆転の現象が見られた。平成12年度には文学科に英米文学専攻があったためか経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。昨年度は経営情報実務学科約35.3点、現代文化学科約36.0点と僅かに現代文化学科の平均点の方が高かった。しかし今年度は経営情報実務学科の平均点の方が高い結果となった。このことは実際に授業を担当していても感じられることであるが、それが数字の上にも表れた結果になった。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである。



今年度の学生の得点分布はこのようになっているが、今回のこのグラフには今年度入学生の英語力の特徴が表れているように思える。前にも述べた通り、前年度の傾向は、基礎力に不安のある中間層が今まで以上に膨れ上がったことであった。できる学生の層もできない学生の層もあったが、かなり多くの学生が20点後半から40点前半に集中していて、この中間層の動向がはっきりとはつかめなかった。今回の英語力調査ではそのことを踏まえ、出題問題をやさしくし、平均点が60点を超えるような問題を作成することを心がけた。そうすることによって、今まで中間層と

されてきた領域がどのような広がりを見せるかということ把握できるのではないかと思ったからであった。

グラフを見てみると、昨年度のそれよりもかなり大きな広がりを持っていることが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名、その中間の30点から74点までの層が中間層であろう。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があることが分かる。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類できよう。この3つの層が本年度女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えている。

### 3. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題や低かった問題について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は1番の

(1) A : Do you know what language is ( ) in Mexico?

B : Yes. It's Spanish.

1. thrown      2. lent      3. spoken      4. told

であり、正解率は86.0%であった。選択肢1, 2, 4を選んだ数はほぼ同数であった。

2番目に正解率の高かった問題は2番の

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B : Sure. ( ) straight down the street. It's on the right.

1. Break      2. Catch      3. Go      4. Put

であり、正解率は84.9%であった。1番も2番も短大で勉強を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題し、90%を大幅に超える正解率を期待していたので、この結果には残念であった。

1番と2番の他に正解率が80%を超えた問題は以下の3題である。

(4) There are many ( ) of food from all over the world in this store.

1. chances      2. jobs      3. trips      4. kinds

正解率は81.7%であった。不正解者の多くが3を選んでいて、5人に1人弱がkindの意味を知らないことになる。

(10) A : I don't know ( ) Central Park is.

B : It's not far. I'll show you.

1. who      2. when      3. where      4. whose

同様に81.7%の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいった。Central Park そのものを知らないのであろう。

(42) どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where ( ① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice ) coat ?

1. - ⑥- ⑤-- 2. - ①- ④-- 3. - ②- ④-- 4. - ③- ⑤--

これも疑問文の基本的な形であるが正解率は80.6%にとどまった。

反対に、最も正解率の低かった問題は26番の

(26) Be kind ( ) old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

であり、正解率は21.5%であった。65.5%もの学生が選択肢3の of を選んでいた。

次に正解率の低かった問題は18番の

(18) If it ( ) tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

であり、正解率は23.6%と低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。4を選んだ者はほとんどいなかった。主語 it の後ろに直接形容詞をつなげたり、be 動詞がないのに～ing 形を続けたりする基礎力不足が目立つ。

次に、英語基礎力を試すために6番の出題をした。

(6) A : This is a report ( ) I wrote in Japanese yesterday.

Could you check it for me, Jiro ?

B : OK, Laura.

1. which 2. when 3. who 4. whose

関係代名詞を習得しているかを問う基本的な問題であるが、正解率は半分にも満たなかった。3人に1人が2の when を選んでいた。yesterday という言葉に引きずられたのであろうか。

同様に基礎力を試すために出題した8番であったが、正解率は34.4%と低かった。

(8) Mr. Harada went to Kenya ( ) pictures of African animals.

1. takes 2. took 3. taken 4. to take

関係代名詞に続いて不定詞の使い方を理解していない学生が約3人に2人いることが分かる。2の took と3の taken を選んだ学生はほぼ同数であった。

1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。文法・語法については基礎力に不安を感じたが、対話の問題や日常的な言い回しをやさしい英語で並べかえる問題は全体的に良い結果であった。これも今の学生のひとつの傾向であろうか。

#### 4. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。最近では様々なタイプの学生が入学するようになり、それに伴い全体的な学生の理解力が低下したとか単にできない学生が増加したということがしばしば言われるが、今回の調査結果を見る限りではそういった意見は必ずしも正しいとは言えない。確かに今回の試験で30点にも満たない学生も数名いるが、その反面かなりの基礎力を持った学生もいる。前回の調査でもはっきりしたことであるが、本学の特徴はかなり基礎力のある学生とほとんど基礎力のない学生との中間の学生が非常に多いということである。そしてその中間のレベルの学生群はだいたい3つの層から成っていることも今回分かった。これは大きな収穫であり、今年度のクラス分けの際にも役立った。基礎力のあるクラスから順にA, B 1, B 2, B 3, Cと分け、能力別クラス編成で授業を行い、教育的効果を上げられたと思う。実際の授業ではTOEICのスコアアップに目標を置き、TOEIC式の問題を扱ったものを教科書に採用した。また、本学で年2回TOEIC Bridgeを実施し、そのスコアを基にして後期にクラス替えを行った。それに加えて、今年度はマルチメディア教材を活用した授業を試験的に導入したが、学生の反響はこちらが思っていた以上に大きかった。使い方によっては、英語に対して拒絶反応を示していた学生をも引き付ける可能性があるので、これは来年度の大きな検討課題としたい。